

豊田市
郷土資料館
だより

No.42

Toyota City Museum
Of
Local History



農村歌舞伎（中金町 岩倉神社舞台）

目次

・とよたの郷土芸能—甦る農村歌舞伎—	2
・吉兼1号古窯跡発掘調査	3
・拳母藩内藤家と彦根藩井伊家	4
・近代建築—時代を映す建築物—	5
・榑原サミットから	6
・矢作川源流域を訪ねるツアー	7
・文化財シリーズ・資料館ニュース	8

とよたの郷土芸能 — 甦る農村歌舞伎 —

10月12日、中金町岩倉神社舞台では、「石野芸能まつり」が開催されました。地域のみなさんの芸能発表に続き、中金町有志による「忠臣蔵三段目、殿中松の間」旭町歌舞伎保存会による「弁慶上使」の歌舞伎2題が上演されました。

歌舞伎の起源は古く、17世紀初めに、出雲阿国が京都で始めた歌舞伎踊り（阿国歌舞伎）まで遡ります。「歌舞伎」は「傾き」ともいわれ、時代への反抗や風刺的な要素があり、また風俗を乱すものとして、たびたび禁止されました。歌舞伎は歌舞伎踊りから女歌舞伎、若衆歌舞伎、野郎歌舞伎へと巧みに姿を変え、庶民の芸能文化として厚い支持を受けてきました。

江戸時代後期には、農村で爆発的な人気を博し、祭礼恒例の催し物となり、仮設小屋だけでなく本格的な舞台が争うように造られました。単なる小屋的な建物ではなく、六所神社の舞台のようにガンドウを持つもの、岩倉神社の舞台のように本格的な回り舞台を持つものも造られるようになりました。

また、当初は歌舞伎一座を招いての買い芝居であったものが、歌舞伎熱の高まりとともに、地域に万人講が結成され、地元だけでなく近隣地方へ遠征興行を行うようになり、やがて九久平の弁天座や高岡の若林座のような常設の芝居小屋までできるようになりました。明治・大正の隆盛期には歌舞伎だけでなく、股旅ものや人情ものも人気を集めました。第二次世界大戦を境に興行も減り、ラジオやテレビの普及により壊滅状態になりました。



西広瀬八剣神社舞台

現在は夏祭りに囃子が演奏されているが、かつては盛大に歌舞伎が興行されたものと思われます。



岩倉神社舞台での歌舞伎興行

これまで農村舞台に歌舞伎の面影を残すのみとなっていました。13年度に中金町岩倉神社舞台の大改修を行い、回り舞台の復元を行いました。昨年のこけら落とし興行に続き、今年度も歌舞伎が興行され、絶えて久しいとよたの歌舞伎にも復活の兆しが芽生えたことは嬉しい限りです。（蟹一天）

豊田市内の農村舞台

神社名	場所	状況
神明社	城見町	現存
岩倉神社	中金町	市指定文化財
八幡社	藤沢町	消滅
野神社	野口町	消滅
八柱神社	国附町	消滅
八剣神社	西広瀬町	現存
八柱神社	乙部町	消滅
八柱神社	矢並町	消滅
六所神社	坂上町宮口	市指定文化財
豊栄神社	坂上町杉木	消滅
春日神社	滝脇町	消滅
津島神社	幸海町	現存
志賀神社	岩倉町	現存
神明宮	九久平町	現存
神明社	王滝町	現存
神明宮	桂野町	現存
八幡社	加茂川町	消滅
白山神社	古瀬間町	消滅
神明社	穂積町	現存
神明宮	中垣内町	現存

吉兼^{よし かね} 1号古窯跡の発掘調査

遺跡の位置

吉兼1号古窯跡は市内西部の西加茂郡三好町に近接した、白山町七曲12-335地内にありました。猿投山麓から南にのびる丘陵と開析された谷が縞状にならぶ地形で、逢妻女川の源流域に位置しています。遺跡周辺は猿投窯と称される猿投山西南麓古窯址群の東端部にあたり、谷に面した緩斜面に古代、中世の窯跡が点在する一帯です。

窯跡は逢妻女川の支流、汐見川が東西に分かれた東側の谷の奥に吉兼池と呼ばれる池に臨む標高65～85m前後の緩斜面に灰原の一部と焼土が確認されていました。池の対岸には吉兼1号窯跡と同時期の灰釉陶器片を出土する吉兼2号窯跡が位置しています。

調査

平成12年に吉兼池西側の丘陵に日赤看護大学の建設が計画されたため、豊田市教育委員会（郷土資料館）において平成13年5月に現地踏査と試掘を実施、同11月から翌14年3月まで本調査、同9月に補足調査を行いました。

調査の結果

調査の結果、平安時代前期（9世紀頃）の窯跡1基を発掘しました。窯跡は吉兼池に望む緩い斜面の中腹部で、鞍状に突出した部分に構築されていました。昭和10年代の砂防工事によって窯の胴部が壊されており、全体の1/3が滅失していました。

残されていたのはのぼり窯本体の煙道に近い上部の長さ3m、幅1.2mと焚口前の灰や炭、未製品を廃棄した灰原と呼ばれる斜面です。灰原の広さは焚口を中心に縦9m、横12mの規模で扇形に開いていました。窯全体の傾斜は約30度の勾配でした。窯の構築は現地表から15～20cmほどの深さで側壁や床の硬い焼土に達し、意外に浅く、窯体のほとんどが地上に露出していたことがうかがわれます。窯体上部の傾斜は全体の傾斜に比べて緩く、20度ほどで、煙道はほぼ直立していました。床は非常によく焼け、灰白色で、硬くしていました。断面の調査で窯体の床にトレンチを設定して掘り下げたところ内部から無釉の坏が伏せられた状態で出土しました。

出土品のほとんどが破片であったのは、形の整った

器は製品として出荷されたためと考えられます。全体でコンテナ30箱分を採集しました。製品は釉のかけられた灰釉陶器と無釉の須恵器、窯道具に大別されます。灰釉陶器は長頸瓶、平瓶、三足盤、碗、皿、段皿、須恵器では甕、高盤、盤、蓋、碗、双耳碗、窯道具では三又トチン、四又トチン、コップ状つくが出土しました。

まとめ

吉兼1号窯跡は全長8m位の規模を有するのぼり窯で、操業年代は平安時代前期頃と推定されます。窯体の床面内部から碗が検出されたことから数回の補修が行われたと考えられます。遺物の出土量から、操業期間は比較的短期間であったと考えられます。灰釉陶器と須恵器のグレードの異なる製品を同時に焼成していた点が注目されます。その生産を支えたのは付近に露頭する良質な粘土と燃料(松)や逢妻女川の水運であったと考えられます。



発掘された窯体

挙母藩内藤家と彦根藩井伊家

～ 挙母藩史・新視点を探る ～

井伊直弼^{い い なおすけ}といえば、江戸幕府の大老職を務め、ペリ
ー来航にともなう幕末動乱期の幕政を担った人物です。
安政の大獄を強行し、桜田門外で暗殺された人物とし
て有名です。この幕府の大老、13代彦根藩主井伊直弼
は、実は挙母藩内藤家と深いつながりがあります。

挙母藩内藤家は、寛延2年(1749)に国替えとなり上
野国安中(群馬県安中市)から三河国挙母(豊田市の挙
母地区)の領主になりました。挙母に来てから数える
と初代政苗^{まさみつ}に始まり、7代文成^{ふみなり}まで約120年間この地
の領主で、明治維新を迎えています。この領主7人の
うち、5人が他藩からの養子です。2代学文^{さとふみ}は御三家
の1つ紀州藩7代徳川宗将の子、3代政峻^{まさみち}は内藤本家
日向延岡藩2代内藤政陽の子、4代政成^{まさなり}と5代政優^{まさひろ}は
譜代大名筆頭の彦根藩11代井伊直中の子、そして6代
政文は彦根藩井伊中頭(直中の子)の子です。



内藤家の城・挙母城跡(通称七州城)

歴代の藩主は、世継ぎがなかった訳ではなく、何ら
かの意図があって代々養子を迎えていると思われます。
その理由は政治的な要因か金銭的な要因か、はっきり
とはわかりません。

さて挙母藩と彦根藩、そのつながりの深さは、挙母
藩主7人のうち3人が彦根藩から来ていることからも
わかります。このうち井伊直中の子である政成、政優
はこれまで、直中の5男と8男とされてきました。こ
れは挙母藩内での見解で、「挙母藩史」でも5男と8
男として記述しています。この数え方は、井伊直中の
男子15人のうち死産と1～2歳で亡くなった3人そし
て家臣の養子となった10男、12男を抜いた数え方と思
われます。この数え方をすると直中の男子は10人とい

う見解になり、井伊直弼は9男となります。しかし井
伊家の方では、こうした考え方はされておらず、現在
歴史研究の上でも井伊直弼は井伊直中の14男が定説で
す。したがって挙母藩内の歴史を考える上でも、政成
は8男、政優は13男として考える方がよいと思われま
す。その結果、新たに見えてくる事があります。それ
は内藤政優と井伊直弼との関係です。政優と直弼は13
男と14男の続柄で、5歳違いの同母兄弟であることが
わかります。母は共に君田十兵衛重道女です。政優は
文政13年(=天保元年・1830)実兄である内藤政成の養
子となり21歳で挙母藩主を継ぎますが、その後も部屋
住の直弼を励ましていたと思われます。弘化3年(1846)
に直弼は兄直元の死去でにわかに彦根藩井伊家世子の
地位を継ぎます。また嘉永2年(1849)には、政優が直
弼としばしば手紙を交換している様子や直弼が江戸藩
邸へ来訪している様子が内藤家文書(江戸表日記抜書
等)から知られます。



「江戸表日記」(内藤家文書)

歴代藩主の中でただ一人奏者番をつとめた藩主・政
優は、幕政に参与する井伊家からの情報や、日本の情
勢を肌で感じて藩政に生かしていたといえそうです。

こうした視点で新たに挙母藩史を見てみると、また
違った見方が生まれるのではないのでしょうか。

(本稿に関して、市内在住・杉本育也氏に御教示・資
料提供いただきました。 伊藤智子)

近代建築 — 時代を映す建築物 —

幕末から明治にかけての時代は、日本の歴史にとって大きな変換点の一つでした。それは、産業などさまざまな分野で西洋の技術が積極的に取り入れられ、「近代化」が進められた時代でもあります。

この変化の波は明治・大正期の豊田市域にも及んでいます。そして、地方における「近代化」を、私達は今に残る当時の建築物から垣間見ることができます。この稿では、時代を反映した建築物の例を2つ紹介します。

名古屋鉄道三河線の上挙母駅から豊田市駅へ向かう途中にある^{かなやしたかいきよ}金谷下開渠は、大正9年(1920)に竣工した鉄道橋で、現在も建設当時のまま利用されています。鉄製の橋梁部分には、「大坂 平瀬製鉄所 大正8年製造」と刻印された文字を見ることができます。そして橋脚は中央部分が煉瓦積みで、その左右が石組みによって造られています。

煉瓦は、西洋技術を移植する時期において、西洋式建築の主要な材料として用いられていました。しかし、煉瓦造りの建物は地震に弱く、明治24年(1891)の濃尾地震では、多くの煉瓦造りの建物が倒壊しました。ただし、その後も建築に鉄筋コンクリート工法が導入・定着する以前は、煉瓦は主要な建築材料として用いられました。そして高品質の煉瓦を生産すること、施工精度を上げること、帯状の金具を煉瓦の間にはさむことなどによって、煉瓦造りの建物の耐震補強をしていたようです。その点から考えると、金谷下開渠の橋脚は石組みによって煉瓦積みを補強していたと考えられます。

煉瓦というその時代に特徴的な建築材料で造られている金谷下開渠は、大規模な改修を受けておらず、鉄道という近代的な交通システムが豊田市域に開通した当時の面影を残す記念碑的な建築物ともいえます。

現在、**青少年相談所**として使われている建物(平成12年登録文化財指定)は、豊田市域に現存する最古の鉄筋コンクリート造りの建物です。この建物は、大正11年(1922)に、愛知県蚕業取締所第九支所として建設されました。

この建物は、コの字型の平面形や、広い水平方向の窓などに西洋建築的な装いを示す一方、屋根の千鳥破風や各柱頭部の^{だいと}大斗などに和風建築を意識したデザインが施されています。また、建物の柱と外壁は鉄筋コンクリートで造られていますが、床と屋根は木造にな

っています。これは、従来の煉瓦造りの建築において煉瓦で造られていた柱と外壁を、新しい材料である鉄筋コンクリートに置き換えたものと考えられ、初期の鉄筋コンクリート工法の導入のされ方を知ることができます。

そして、この建物が愛知県蚕業取締所第九支所として、当時の最新技術であった鉄筋コンクリート工法によって建てられたことは、当時の愛知県において蚕業が重視されていたこと、挙母が西三河地方の繭取引の中心地として栄えていたことを雄弁に物語っています。また中心市街地の一角に立地する建物に当時の最新技術が導入されたことは、一地方都市の「近代化」を象徴するものだったともいえます。(天野博之)



金谷下開渠の橋脚



豊田市青少年相談所(旧愛知県蚕業取締所第九支所)

榊原サミットから

11月6～7日の二日間にわたって恒例の榊原サミット（榊原康政公ゆかりの四市市長懇談会）が開催されました。

このサミットは昭和60年から始まり今年で17回目を迎えます。武将榊原康政公にゆかりのある豊田市、姫路市、館林市、上越市の4市が持ち回りで、毎年開催しています。

1日目の11月6日には、平成8年に4市で結ばれた「都市災害時応援に関する協定」を基に、災害時の協力体制を充実させるための手順などを協議しました。サミットには17代目となる榊原政信氏夫妻も参加され、翌日の11月7日には市内の隣松寺と松平郷を訪れました。

榊原康政公の祖父清長、父長政の墓所がある隣松寺では木村住職、天野区長さんをはじめ、地域や檀家の代表の皆さんが、山門前でお出迎えされました。本堂での読経のあと、ご住職のお話をお伺いし、懇談の場が持たれました。

当日は、榊原康政公が生誕の地である上郷町を学区としている高嶺小学校の6年生代表も隣松寺を訪れました。学校の総合学習の時間で、郷土に生まれた武将「榊原康政公」を学習しているとのこと。今年の学習発表会では、この学習の成果を劇にして演じる予



榊原清長・長政の墓所を訪れた政信氏

定で、その台本が榊原夫妻に手渡されました。

隣松寺を後にした一行は、その足で松平郷を訪れました。

高月院では田中祥雄住職から松平親氏の願文「天下和順」や松平家の系譜についてのご説明をしていただきました。松平郷園地内の天下茶屋に立ち寄った後、松平郷館の展示資料も見学されました。

サミット一行がこの松平の地を訪れるのは初めてで、榊原家が属した徳川家の祖先の地を感慨深く踏みしめていらっしやいました。



高月院を訪れたサミット一行

榊原氏と四市の関係

〈豊田市〉

榊原氏は南北朝時代の伊勢国守護職仁木義長を祖としている。後に伊勢の榊原村に居を構えたことから一族の姓を「榊原」としている。

康政の祖父にあたる清長が三河国上野城下に移り住み、松平親忠に仕えている。その子長政は松平広忠、元康に仕え、上野城主酒井忠尚に属している。

〈館林市〉

徳川家康の関東八州への国替えの時、康政は館林10万石を拝領し、城主となっている。慶長11年、享年59歳で亡くなり、館林の善導寺に葬られている。

〈姫路市〉

慶安2年、3代忠次の代に15万石に加増され、姫路藩に転封している。

その後、越後村上藩に転封となっているが、6代、政邦の代の宝永元年に再び姫路藩主となっている。

〈上越市（越後高田）〉

9代政永の代に越後高田藩に転封となり、以降、幕末まで続いた。

「矢作川の源流域を訪ねる」ツアー

平成14年11月9日(土)

11月2日～12月15日に開催された特別展「川をめぐる暮らし」が盛況のうちに終わりました。この特別展の関連事業として、11月9日(土)に「矢作川の源流域を訪ねる」ツアーを開催しました。このツアーの模様をレポートします。

豊田市のほぼ中央を流れる矢作川は全長約120km、長野・岐阜・愛知をぬって三河湾に流れ込む大河です。豊田市民にとって最もなじみの深いこの川がどこからやってきているのか？矢作川の出発点はどうなっているのか？そんな疑問からこのツアーを企画しました。当日参加した市民は28名。午前9時に郷土資料館へ集合してもらいました。今年は例年より冬が早く到来してしまったのか、この日も12月中旬から下旬並みの気温とのこと。参加者の皆さんも防寒はしっかりされているようです。はじめに今回の特別展の展示について担当者から説明がありました。かつては川と人々の生活が、今以上に密接であったことを展示資料を通して知っていただきました。この後バスに乗り込み設楽町へと向かいます。

今回訪ねた源流は設楽町にある矢作川の支流、名倉川の水系となります。茶臼山高原道路近くに位置する岩伏山を水源としています。豊田から足助をぬけ登山口まで1時間30分ほどバスの旅となります。バスの中では、ツアー参加者の一人、市役所農林課の原田さんから森と川をテーマにお話しがありました。森林資源・水資源と私たちの関わりについて考える良い機会となりました。

さて、登山口に到着しいよいよ源流を目指して岩伏山登山の開始です。気温はマイナス1度。数日前から雪もちらほらし始めているようで、登山道も濡れています。足元に注意しなければならないものの沢の音が耳に心地よく響いてきて、目的地への期待は膨らみます。道中は巨石の間や沼地の中を通ったり、東海豪雨時の災害跡地を横断したりしました。沢の流れも徐々に細くなっていくのがわかります。



源流を目指して岩伏山登山

木々の葉に付いた雪が解け落ち、小雨が降っているかのような中を歩くこと40分、ついに矢作川の源流に

たどりつきました！山の斜面の小さな谷からわずかに流れ出す清水。ゆるゆると湧きこぼれる清水はもはや音をたてることもなく、あたりを静寂に包みます。これこそが矢作の流れの原点です。参加者の皆さんもその清水を手のひらに受け、それぞれに思いをめぐらせていたようです。



矢作川源流に到着

下山後はもう一つの目的地、長野県平谷村の柳川にある「矢作川源流の碑」を訪ねに行きます。茶臼山高原道路から見える山々は、例年になく早い降雪のため紅葉の上にうっすらと雪を冠し、なんとも不思議な光景です。途中昼食をはさみ根羽村をぬけて平谷村へ向かいます。源流の碑は国道153号線柳川橋のすぐ下にあります。柳川は長野県浪合村と平谷村の境に位置する大川入山を水源としています。当初は設楽町よりも北部に位置するこの平谷村の柳川を遡ろうと考えていましたが、調べてみると途中川の中に入って進まなければならないということで、断念せざるを得ず、源流の碑だけの見学となりました。



長野県平谷村の矢作川源流の碑

帰路は矢作ダム方面から矢作川沿いに下るルートをとりました。ダムや築などを車窓に眺めながら、川と人々の暮らしとの関わりに思いをめぐらせ、郷土資料館へ戻ってきました。

今回のツアーで矢作川がより身近なものとなりました。同時に矢作の流れから私たちが受ける多くの恩恵を忘れずにいたいものです。
(成瀬憲作)



長篠合戦図



長久手合戦図

平成14年10月1日、新たに豊田市指定文化財になった「長篠・長久手合戦図屏風」です。この屏風は、市内在住・浦野正二氏から寄贈されたもので、寺部渡辺家ゆかりの品です。浦野氏の曾祖母が渡辺家から浦野家へ嫁いだ折りの、嫁入り道具の一つとして伝えられました。

尾張藩付家老・犬山藩成瀬家に伝来する長篠の戦いと長久手の戦いを一対で描いた「長篠・長久手合

文化財シリーズ

42

長篠・長久手合戦図屏風 (市指定文化財)

戦図屏風」の写本ですが、寺部渡辺家初代・渡辺守綱の合戦での活躍が強調されて書き加えられています。

この屏風は成瀬家写本群の中でも非常に優れた作品で、景観、人物の表情など細部にわたるまで行き届いた筆致と彩色がみられるなど、重層感のある屏風です。また江戸時代、この地方の領主の一人であった渡辺家の歴史を知る上でも貴重です。

資料館NEWS

特別展「川をめぐる暮らし」開催

11月2日(土)～12月15日(日)まで平成14年度郷土資料館特別展「川をめぐる暮らし」を開催しました。期間中は1,106人の方にご覧いただきました。展示内容は、豊田市内を流れる川の紹介、水運、川の利用(水車、ガラ紡、トロミル、用水、ダム、発電所)、川からの恵み(漁具、築、矢作川鵜飼、鮎調理法)、洪水・水争い等川との闘い、川の伝説などです。特に人気のあった展示は、中村寿一画「勘八峡流し図屏風」、内藤家文書「献上塩鮎仕立方之覚」に基づき復元した塩鮎(実物)、龍骨車、妙昌寺に伝わる伝「龍骨」などでした。大盛況のうちに閉幕しました。

刊行物のご案内

◆『川をめぐる暮らし』 1,700円
平成14年度特別展「川をめぐる暮らし」の図録です。ご希望の方は郷土資料館までお問合せ下さい。郵送販売(送料340円)もしております。

郷土資料館キャラクターが決まりました!

夏休み中の来館者を対象に募集をしました郷土資料館オリジナルキャラクターの名前が決まりました。愛知県指定文化財「手呂の銅鐸」をモチーフにした「どうたくん」、国指定文化財「豊田大塚古墳出土装飾須恵器」をモチーフにした「すえちゃん」です。

応募総数101通でしたが、その大多数を占めた「どうたくん」「すえちゃん」に決定しました。協力いただいた方ありがとうございました。



すえちゃん



どうたくん

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.42■

平成14年12月20日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail : rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL : <http://www.toyota-rekihaku.com>